

最近の活動報告

住民参画型の芸術によるまちづくりから住民参画型のインバウンド観光へ： 津奈木少年野球チームと高雄少年野球チーム「ポニー」との交流記録

呉亦昕

国立中山大学西湾学院教養教育センター助理教授

アートの町づくり

津奈木町は熊本県南部に位置し、水俣市に隣接している、総面積 33.98 平方 km、人口約 4500 人の小さな町である。東南北の三方を山に囲まれ、西側は「日本の地中海」の誉れ高い不知火海に臨む。このため、町の 6 割は山林や傾斜地となっており、棚田に夏みかんや不知火みかんなどの柑橘類を栽培している。沿海部は、不知火海の豊かな水産資源で知られ、タイ、フグ、ヒラメの養殖が盛んである。

しかし、豊かな山海の資源を有する津奈木町は、かつて、水俣市のチッソ工場が排出した工業廃水による水俣病で健康被害を受けた地域の 1 つである。住民が公害によって心身に深刻な影響を被っただけでなく、地域のイメージは長期にわたって低下した。汚名を被ったことによってもたらされた社会的差別を憂慮して、数多くの住民にとって水俣病は長年にわたって隠し続けてた傷跡となった。傷跡を修復し、地域に対するイメージを向上させるため、津奈木町は 1984 年から「緑と彫刻のある町づくり」を推進している。まず、彫刻作品を購入して町内の公共空間や橋梁などの交通の要衝に設置した。続いて、つなぎ美術館の整備に向けた取り組みを徐々に進め、町全域をひとつの開放型の美術館とし、アートのエネルギーを通じて、水俣病がもたらした傷跡を修復し、未来へのビジョンを共同で描いていった。

高価で、すぐに経済効果を生み出すことが難しい芸術作品で公害の被害地域を再建するこうした方法は、40 年前のその当時は、まだ理解されにくく、プロジェクトを開始した当初は批判を受けた。とりわけ、裸体をモチーフにした何点かの彫塑は、初期のころは、純朴な住民から「恥ずかしい」と思われ、昼間は目を向けることができず、夜になってこっそりと鑑賞に来るということもあったという。しかし、これらの作品は話題を集めることに成功した。メディアによる報道を呼び、ほかの地域の芸術愛好家が訪ねてくるようになり、津奈木のイメージチェンジにつながった。現在、津奈木町に設置されている彫刻作

品は計 16 点で、地元の象徴となり、また、日常の風景となっている。また、2001 年に開館したつなぎ美術館も、すでに水俣・芦北地区のアートとカルチャーの中心となっている。

つなぎ美術館は歴代の津奈木町長が館長を務めている。専任の主幹・学芸員である楠本智郎氏が企画と管理を担当する中心的な人物である。開館から 3 年後、楠本氏は、館内で現代美術展を開催した際、ほかの地域の行楽客の関心を集め、津奈木の交流人口は増加したものの、地元住民の参加延べ人数は多くなく、地元の住民は地元の人が展示会を開いてようやく参観に訪れるということに気付いた。そこで、地元住民の日常生活に美術館をより融け込ませようと、2008 年に「住民参画型現代アート計画」の推進を始めた。これは、のちに「住民参画型アートプロジェクト」と名称を改め、住民を執行委員に招聘し、アーティストと共同で芸術活動を企画・実施した。そのなかで、地元資源の活用と再評価を行い、地元の課題に対応した。このプロジェクトは「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」と相俟って、「赤崎水曜日郵便局」、「石霊の森」、「海渡り」、「入魂の宿」など、美術的な表現をコアとし、地元の歴史や文化、自然、地元の課題と結び付いた著名な作品を生み出した。その間を貫く理念とは、芸術活動を通じて、人と人、人と土地の間にさまざまな「つなぎ」を創出することだが、そればかりでない。こうした芸術活動が水俣病の歴史や水俣病が猛威を振るう前の生活の姿など、地域の潜在的な記憶を呼び覚ますきっかけとなり、住民がその参画過程において傷跡をいやし、ふるさとに対する誇りとアイデンティティを取り戻すのを後押しするというものである。



海渡り

このほか、美術館と町役場との良好な協力もアートプロジェクト成功のカギである。住民、アーティスト、美術館の学芸員、役場職員が共同で、町内にそれぞれ魅力ある文化的な空間を作り出し、それとともに、これらの空間が「つなぎ」の効果を持続的に発揮できるようにしている。津奈木町政策企画課の濱田真大氏は、美術館支援関連プロジェクトの推進を担当している。濱田氏は「住民参画型アートプロジェクトとアーティスト・イン・レジデンスつなぎは、効果が見えてくるまでに長い時間を要するため、やはりたびたび疑問をぶつけられました。しかし、町外から津奈木町の特徴を問われると町の人びとは『私た

ちの町は、アートの町です』と誇りをもって答えています。これは、アートプロジェクトが住民の心の中に根を張ったことを示しています」と話す。

今年 79 歳の石田ミサ子氏は、2008 年から「住民参画型アートプロジェクト」に参画している、ベテランの住民委員である。もともとアートに対する関心はそれほどでもなく、ただ、地域活性化を手伝うつもりで参加しただけだった。しかし、活動のプロセスの中でアートの魅力に引き寄せられ、作品のひとつひとつが、多くの人たちが共に努力することによって完成するのを見るたびに感動し、そしてm芸術活動が引き起こすさまざまな新しい人間関係も好みに合っていた。現在、石田氏は活動の計画や実施について、最も積極的に PR し、最も積極的に支援を行う住民のひとりであり、ほかの地域からの来訪者に津奈木の地元文化を熱心に紹介している。2023 年 6 月に、台湾の国科会(HISP)プロジェクト事務局が企画した「九州南部地方創生研修の旅」の一行がつなぎ美術館を訪ねた際には、石田氏が台湾からの学者たちの対応を担当した。

アートだけではなく

アートの町づくりは住民の誇りを高めただけでなく、地域への関心を国内外から集めることになった。住民参画型アートプロジェクトは主として、つなぎ美術館による社会教育の一環として、地元の住民が芸術を通じて新たな体験を獲得することを旨としており、観光に関するものではない。しかし、これらのアクションは観光に関する潜在的なエネルギーを間違いなく刺激した。このため、濱田真大氏ら町役場職員は、アートと観光をどのように結び付けるかについて考え始め、深く、かつ、豊かな意義を有する体験ルートへと発展させた。2022 年から、津奈木町は、九州において地元の伝統工芸やカルチャーシーン、グルメ体験の取り扱いを標榜する旅行会社 UNA ラボラトリーズと協力し、「達仏の仏像彫刻ワークショップ」、「レジデントアーティストと描く津奈木の山・海・街」などアートプロジェクトと連携した観光ルートを打ち出している。2023 年には、台湾の HISP プロジェクト一行の訪問につながった。同年 10 月にはさらに、農業プロジェクトの「つなぎ FARM」と連携し、「津奈木町モニターツアー」を企画し、台湾から、地方創生に取り組む団体と USR 計画に参画する大学の教員を津奈木町に招請し、アートと自然農業が融合したツアーをテストし、フィードバックを得るとともに、将来的な協力の可能性について検討した。12 月には「アートの町で楽しく学ぶ 丸田良友さんの柑橘講座」などのツアーをリリースし、行楽客がアートの雰囲気の中で津奈木町の「環境共生型農業」を体験できるようにした。

「つなぎ FARM」は、津奈木の「アートプロジェクト」のもうひとつの地元ブランドであり、やはり、水俣病の教訓に対する深い反省からのものである。水源の汚染につながりうる化学肥料と農薬の使用を極力低減することにより、植物自身が持つホルモン（植物ホルモン）の特性によって改善を図り、生育環境の調整を通じて作物が自然に適応して変化し、健康的に育つように促進する。たとえば「切り上げ剪定」の技術を使うことで、糖度の高いミカンを多数実らせる方法や、圃場に敷きわらをして雑草の生育を抑制し、牡蠣殻をすき込んで水流を制御する方法は、いずれも、「つなぎ FARM」の代表的な農業技術と戦略である。「つなぎ FARM」の協力農家による農産品と農産加工品は、美術館のそばにある「つなぎ百貨堂」で展示・販売している。

「津奈木町モニターツアー」は 2 泊 3 日の日程で行われた。美術館を訪問し、旧赤崎小学校で「海渡り」と「入魂の宿」などの作品を鑑賞したほか、「つなぎ FARM」の有機農家を訪れるとともに、津奈木町で唯一 JAS 認証を得ている「わらく農園」で有機野菜の収穫を行った。台湾からの訪問客は、農園主の山崎幸治氏と地域おこし協力隊の濱田夫妻の協力のもと、有機野菜と地元の食材で窯焼きピザを作った。石田ミサ子氏も今回の活動に参加し、地元の婦人会が新米でつくったおにぎりや、米粉の団子のみそ仕立てで食べる「だこ汁」、玉子焼き、野菜てんぷらなどを持参し、台湾からの訪問客と地元住民、町役場の職員、町議会議員、UNA ラボラトリーズで今回のツアーを担当した桜井愛氏、蔡奕屏氏がともに熊本の郷土料理を味わった。津奈木町の密接な人間関係とスピーディーな手際の良さが強く印象に残った。この席上、筆者は集まった人たちと、中山大学の学生が津奈木で行う学習について話し合った。その際、ふと濱田真大氏がかつては野球少年であり、現在は地域の野球チームである津奈木クラブのコーチをしているということが話題にのぼった。そこで、筆者はとっさに、2024 年の夏、高雄の野球チームと津奈木のチームを交流させるというアイデアを思いついて提案した。これは、その場にいた人たちのだれもが試みたことのない交流スタイルだったが、全員が迷うことなくすぐに賛成し、それぞれの立場で実行に向けて準備に取り掛かった。



おいしい食事を楽しんでいたら、突然、野球交流をすることになった

さまざまな人たちが参画して共創する「アート×農業×野球」ツアー

筆者は台湾に戻った後、高雄市の少年野球チーム「ポニー」と協議し、最終的に7家族計24人が応募して参加することになった。これには10人のちびっこ選手が含まれ、年齢は幼稚園の年長から中学1年までとさまざまだった。津奈木町政策企画部の濱田真大氏は津奈木クラブとの調整、試合の手配、環境の整備、住民への参加の呼びかけを担当し、国際交流と教育旅行モニターツアーの支援についての申請を行った。UNAラボラトリーズは、宿泊、交通、アートと農業の体験活動の手配を支援した。これは、UNAラボラトリーズにとっても初めて親子の団体を受け入れるケースだった。企画を進める過程で、筆者と、少年野球チーム「ポニー」訪日団代表兼コーチである筆者の夫、濱田真大氏、UNAラボラトリーズの桜井愛氏がオンライン会議を通じて継続的に多方面のコミュニケーションを図り、互いの要望を確認し、スケジュールの調整を行った結果、最終的に今回のものが実現した。プロセス全体を通じていえることは、住民参画の促進と人と人のつながりを生み出すという津奈木町の一貫した地域運営理念に適合したものとなり、多様な参加者がリソースを結び付け、共同で国際交流の旅をデザインした。

少年野球チーム「ポニー」は2024年7月5日から7日まで津奈木町を訪問

した。7家族はいずれも、なんども日本へ旅行で来たことがあるが、津奈木訪問は初めてで、実はこれまでこの地域のことを聞いたことさえなかった。一行は、最初にわらく農園を訪問した。山崎幸治氏は日本のかき氷で子どもたちを歓迎したあと、一行を温室に案内し、無農薬栽培の季節の野菜を収穫してもらった。子どもたちは野菜を採ったり食べたりしながら、いつもは嫌いなピーマンでさえ美味しく味わった。続いて、一緒に窯焼きピザを作った。石田ミサ子氏もちろん今回のイベントに参加しており、婦人会が心を込めて用意した郷土のグルメを持参した。特製の冷たいスープはなんどもおかわりするほどだった。石田氏は、自分の頭で考えていたことが現実のものとなる過程をあらためて目にし、日本語で「幸せなら手をたたこう」を歌って喜びを表し、続いて台湾の子どもたちも「幸せなら手をたたこう」を中国語で歌った。言葉は通じないが、食と音楽を通じて、両者は心で共鳴した。野菜とピザは実においしく、子どもたちはそれぞれ山崎氏からサインをもらった。



山崎幸治氏に農園の経営理念と作物について説明を受ける



新鮮な有機野菜で窯焼きピザを作る

午後は、つなぎ美術館を訪れるとともに、モノレールで舞鶴城公園を訪問し、日本の奇岩百景の1つである重盤岩に登り、津奈木町全体を見渡す美しい景色を眺めた。その後、車で「石霊の森」、「達仏」、「入魂の宿」の屋外アート作品を訪ねて鑑賞した。「石霊の森」は津奈木町役場の近くにあるイチョウの森の中に常設されている。海を臨むこのイチョウの森ではかつては公園が計画されたが、利用率が低く、アーティストの柳幸典氏は遊休化していた百余りの石を活用することにした。石のうちのいくつかを割り、地元住民の肉声を集め石から聞こえるように設置した。水俣病患者の語りや 200 年にわたって地元で歌い継がれる「平国六方踊り」の音声、地元の人が朗読する石牟礼道子の水俣病に関する詩の音声などが収録され、独特のインスタレーション・アートを形成している。それぞれの肉声のささやきは、石の間から聞こえ、木々の間を行き交う。子どもたちは、日本語は分からないものの、石に一つ一つ近付いてじっと耳を傾けていた。子どもたちが知らず知らずに体全体で芸術作品を受け取ろうとする自然な感情の発露に、筆者も強く心を動かされた。



石靈の森

藝術之後是美酒，來到百年老舖龜萬酒造，進行家長們最期待的清酒品味之旅。第三代傳人竹田珍一親自導覽，首次向遊客開放酒藏內部，介紹如何在溫暖的九州利用釀酒冰法製作清酒的過程。第一天的行程就在大人們流連忘返於各種釀造酒、吟釀酒風味，孩子們在溫泉中討論戰術的熱烈氛圍中畫下句點。

アートの後には美味しいお酒というわけで、百年の歴史を持つ老舗、亀萬酒造を訪ねた。保護者たちが一番楽しみにしていた清酒を味わう旅である。3代目の竹田珠一氏が自ら案内し、一行に酒蔵の内部を開放し、温暖な九州地方で、氷を使った釀造方法での酒造りのプロセスを紹介した。初日、大人たちは各種の釀造酒や吟釀酒の風味を楽しみ、子どもたちは温泉で野球の戦術を話し合い、にぎやかに終了した。



亀萬酒造訪問

2日目は、気温 37 度の暑さの中、少年野球チーム「ポニー」と津奈木の野球チームは町総合運動公園で交流試合を 2 試合行った。津奈木町役場は炎天下での試合に備えて、テント、大型扇風機、冷感タオル、冷たい飲み物を用意した。竹田珠一氏は孫娘を連れて観戦に訪れ、カリフォルニア出身と南アフリカ出身の英語教師 2 人も応援に訪れた。午前中の試合では、地元チームの津奈木クラブが 11 対 1 で小馬チームに大勝した。お昼には、石田ミサ子氏がふたたび婦人会とともに訪れ食事の腕前を披露した。津奈木の子どもたちは配膳を手伝い、積極的に高雄小馬の子どもたちと交流した。「ポニー」の選手たちは、台鋼ホークスの応援歌を披露して感謝の気持ちを表し、試合の疲れはまったく見えなかった。午後の試合では、始まるとすぐに、「ポニー」チームは勢いよく連続得点を奪ったが、最後は 9 : 7 で惜敗した。夜は、双方のメンバーが楽しく焼肉を囲み、最後は、日本の夏ならではのスイカ割りを体験し、主客を問わずにともに楽しんだ。あまりの楽しさに、不知火海の美しい夕陽を見逃してしまうほどだった。



高雄少年野球チーム「ポニー」：幼稚園から中学1年生までの混成チーム



大きな声で「いただきます」。それから、一緒に食事をした



石田ミサ子氏が料理を紹介



試合後の集合写真



焼肉大会

3日目は、津奈木少年野球チームは観光バス2台をチャーターし、「ポニー」チームとともに福岡ドームへ福岡ソフトバンクホークス対東北楽天イーグルスの試合を観戦しにいった。これは3連戦のうちの最終戦で、ソフトバンクは前の2試合で連敗していたため、観戦ムードはとりわけピリピリしていた。野球が大好きな子どもたちは、言葉は通じないが、一緒にソフトバンクを応援し、ソフトバンクが劇的な逆転勝利を収めて幕切れとなると、子どもたちは歓声を上げ、互いの友情が深まった。みんなは「これは一生忘れられない思い出だ」と口々に言った。今回の野球交流と国際交流は、福岡ドームにおいて名残惜しさのなかで終了した。「次はいつにしますか」。「ポニー」チームの保護者たちはすでに次の交流を計画している。かれらは、これまでの日本旅行で、今回が「最も楽しかった」と言い、それは「思いがけず、こんなに深く地元の人と交流できたからだ」だからということだった。



一緒に福岡ソフトバンクホークスを応援した



福岡ドーム前での集合写真

個人的な用事で野球交流の活動に参加できなかった山崎氏は、後から「今回の活動を通じて、私たち地元の住民は連携することができ、忘れられない思い出となった。みなさんに心から感謝したい。みなさんが活動を楽しんでいる様子を見るのが一番大事なことだった。今回の活動では、私たちには足りない

ところもたくさんあったが、子どもたちの反応に、私たちはいつも驚かされた」と、特にメッセージを寄せた。

地方が主導する住民参画型インバウンド観光の可能性

新型コロナ規制の解除と円安に伴い、日本各地に大勢の観光客が戻り、これに付随してオーバーツーリズム・観光公害の問題も強まっている。オーバーツーリズムに対する解決策の検討は、日本では新型コロナ前にすでに行われていたが、そのうちの1つの戦略は、従来の観光ポイントとは異なる旅行体験を開発し、内陸部や山間部、僻地に旅行客を誘導するというものである。たとえば、岐阜県飛騨市古川町の SATOYAMA EXPERIENCE（里山体験）は、ツーリストに地元の生活に駆け込んでもらおうというものであり、滋賀県大津市の場合、「湖族の郷」をテーマとする農村生活文化体験を推進しており、いずれも評価を受けたスタンダードな事例である。これらの事例は、住民の参画を強調し、地域に特徴的な自然や歴史、文化、産業、暮らし、景観、土地の物語などの資源を活用するもので、地域主導型の観光（community-based tourism）を推進し、観光客を引き付けるコンテンツをコミュニティが共同で造成し、域内で循環・共生する持続可能な運営モデルを形成している。

今回の津奈木と高雄のポニーチームの野球交流により、津奈木は、住民やさまざまな関係者が物語を共同で創生する舞台となり、この交流は「地域主導型観光」のひな形と見做すことができる。今回の交流は、津奈木町の住民の間にあった既存の密接な関係を展開させただけでなく、外部の関係者の間には、オープンで、かつ、密接な相互関係を見てとることができた。また、町役場は「経験したことのない提案」に直面したとき、スピーディーに対応し、積極的に組織化を図り、新たな創意工夫を受け入れるフレキシビリティとバイタリティを発揮できたことは、あるいは、アートプロジェクトの長期的な蓄積に基づく成果であるかもしれず、津奈木に独特の魅力である。

今後は津奈木の子どもたちにも高雄を訪問してもらい、交流試合を行う機会が設けられることを期待したい。